

「湘煙日記」の政治と家庭—アパタスとしての漢文脈—

鈴木真美子

明治20年代から30年代にかけて、演説、評論、漢詩や文学を通して活躍した岸田俊子／中島湘煙の日記は、彼女の政治的運動のピークに獄中から母宛に書いた「奇談」を初めとして彼女が亡くなる明治34年5月24日の4日前まで綴られた。現在公にされているもので、八冊残っている。

岸田俊子が歴史的影響を及ぼした表現としては、演説や「同胞姉妹に告ぐ」などの演説手法を利用した評論がよく引用されるが、『湘煙日記』の漢文脈は政治的問題だけでなく、中島家の家庭内の事情をも表現している。本稿では、漢文脈が強調する文体の性、『湘煙日記』の文体と内容の性的多義性、そして日記から見えてくる湘煙自身の家庭内／社会的立場を、一種の明治の女性表現として考えたい。もし漢文脈に明治半ばの教育を受けた女性の経験や立場を表現する場としての可能性があったならば、湘煙が日記を通してただ男性的では無い表現として、どのような社会的立場と語りの手法を生み出していたのかを探る。

職業婦人と自活型女性像—大阪市社会部調査報告書の分析—

奥村則子

1925～38年にかけて、大阪市は職業婦人調査を5回おこなっている。報告書では、「都市」社会政策の立場から自立賃金を得て独立の生活を営むことのできる自活型の女性労働者像が提言されていた。提言は男女雇用労働者の形成こそが、重要と考えていたのである。

当時の人々からすると、職業婦人は、女性でありながら収入があり、自立した生活を送りうる存在に見えた。たしかに、彼女たちは自らの意志で職業を選択し、転職・退職が自由で、勤務する間のみ拘束されるという従来なかった近代的な形式で労働についている。

しかし実際には、職業婦人は、ほんとうの意味での自活型の女性とはいえなかった。調査によると、彼女たちの賃金の4分の1が親世帯の家計へ投入され、また5分の1が貯蓄されている。自己の消費にあてられるのは、賃金の半分程度である。親と同居しているものも8割いる。多くの職業婦人の労働と生活は、自活型女性像からは、ほど遠い。

なぜ提言は実現しなかったのか。その実態を大阪市社会部調査報告書に探り、要因を分析する。

母を想像すること—小林美代子『髪の花』

川原塚瑞穂

「母上様、三回目の手紙をさしあげます。」という語りかけで始まる小林美代子の小説『髪の花』（「群像」昭和四六・六）は、記憶を失った入院患者の女性が、顔も覚えぬ、生存すら分からぬ母に向けて綴った二十一通の手紙により構成されている。小林自身の入院体験をもとに書かれたこの小説には、当時の精神病院の抱える様々な問題点とともに、「狂気」のレッテルを貼られた女性の「普通でありたい」という切実な願いが描き込まれている。しかしこれは、決して社会的告発や苦悩の告白にとどまるものではない。精神病院という近代の隔離装置のなかで声を奪われた一人の女性が、破壊され、奪われたアイデンティティをいかに再構築し、言葉を獲得していくかというダイナミックな闘争の過程に他ならないのだ。架空の母を想像／創造し、手紙を書き続けることで彼女が何をしようとしたのか、考察する。

内診台に乗るということ

三村恭子

F-GENS、C3 サブプロジェクトでは、2005 年秋以降、産婦人科で使用されている内診台の開発と使用についての質的調査を展開してきた。そのうち、内診台メーカーへのインタビューについては、2005 年度の若手セッションにおいて小門が報告を行なった。また、2006 年度の若手セッションでは、小門・三村・水島で、ヘルスケア全般におけるセクシュアリティの問題について考察したが、その中で内診台も事例として取り上げた。さらに、三村・小門（2007）では、日本国内の産婦人科における内診台および内診室には、当たり前とされているさまざまな暗黙のルールがあり、そのため内診台に乗るといった動作が複雑になっていることを、海外の事例と比較することにより明らかにした。そこで、本発表では、これらの報告内容を今一度総覧した上で、さまざまな医療機器にその考察を広げる。そして、報告者が現在取り組んでいる「医療機器からみた身体像」の創出について、また、痛み・緊張・不快感といった体験を開発へのインプットとする可能性について展開していきたい。